

研究結果報告書

日本語・インドネシア語の擬音語の調査研究：日本人・インドネシア人の擬音語感覚の分析を中心に

所属：北スマトラ大学 文化学部日本語学科

役職：日本語講師

氏名：ハンダヤニ・ディアシャフィトリ

日本人とインドネシア人が音を言葉で表す時の感覚はどうなっているのかを調査した。調査対象として提示した擬音語は、調査の時間的制約などを考えた上で選ばれた五つの擬音語表現である。

- (1) 引き戸の扉を「ガラガラ」とあけるときの音
- (2) ページを「パラパラ」とめくるときの音
- (3) 「ぱちぱち」と火の燃える音
- (4) 「トントン」と家の階段を上がる音
- (5) ゴシゴシ」と浴室をブラッシングする音

調査の方法は、日本人・インドネシア人にすぐには思いつかないような音だけを聞かせると、日本人・インドネシア人の答えはバラバラになる。しかし、引き戸の扉を開けるときの音、ページをめくるときの音、火の燃える音、家の階段を上がる音、浴室をブラッシングする音と分かりながら、音を聞かせると、大体の日本人が似たような事を書くということになる。インドネシア人は引き戸の扉を開けるときの音、ページをめくるときの音、火の燃える音、家の階段を上がる音、浴室をブラッシングする音を分かりながら聞いても、みんながバラバラな答えを書いたのである。人によって答えも違う。なぜかというところ、インドネシア語の場合は物事の音その場で自由に作れるものだし、書き言葉には殆ど使わず、大会話の際に作るものからである。日本人が持っている共通の擬音語の体系は、何がどうする音という音の整理が日本人の頭の中に枠組みがあるので、音を言葉で表す時の感覚をもっている、インドネシア人は持っていないということをデータから見られる。日本人は擬音語の選択を明確に意識しているものと思われる。実際のコミュニケーション行動の中でこの意識がどれほど行動に反映しているかは、この度の調査だけでは明らかにできないが、今後資料を増やし、さらに考えを深めていきたいと考えている。

以上のように、日本人・インドネシア人の擬音語感覚について、少し述べてみた。

今後はインドネシアに於ける日本語教育の普及のために、教育の面からみる日本語の擬音語・擬態語への把握、導入方法について、提案を試み、インドネシア人日本語学習者の擬音語・擬態語学習についてより充実した考察を深めたい。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名: 「日本人・インドネシア人の擬音語感覚」

会議名: 言語セミナー

日時: 2019年3月9日

場所: アサハン大学インドネシア

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

なし

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

なし